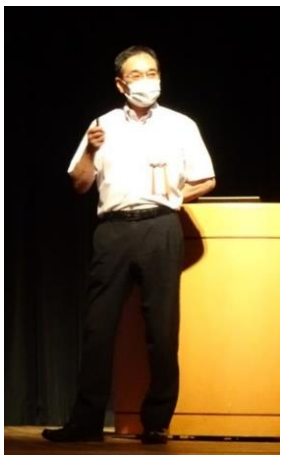
令和４年度　愛知県栄養教諭研究大会

令和４年８月９日（火）ウィルあいちにて研究大会が開催されました。

教育講演会

演題「令和の日本型学校教育を深める」

岐阜聖徳学園大学　教育学部　教授　玉置　崇　氏



「令和の日本型学校教育」とは、「日本型学校教育」のよさを残しつつ新しい時代の学校教育を実現するものであること、また、新学習指導要領に示された主体的な学びをつくる「個別最適な学び」や、他者との対話を通して自分の考えを広げ深める「協働的な学び」は、新しい時代を生きる子どもたちの可能性を引き出し、豊かな人生を切り開くための教育であることを学びました。そして主体性を育むには、振り返りや自己選択の機会をつくること、子どもたちがつながり、学びを深めるには、素直に「分からない」と言える環境を作ることなど、今後指導していく上での大切なポイントをお示しいただきました。ＩＣＴの活用は、より効果的で、活性化された、誰一人取り残さない授業の実現の助けとなることを学びました。栄養教諭も、時代に乗り遅れず、ＩＣＴの活用の幅を広げ、子どもたちが、よりよい食生活を営むことができるよう、支援していきたいと思います。

【ご講演を拝聴しての感想】

GIGA スクール構想は、給食センターと学校、栄養教諭と子どもたちや学級担任の距離を近くするためにも有効であると思います。そのためには、私たち栄養教諭も ICT を活用して、実践と検証を重ねることが必要だと思いました。

私たち栄養教諭が行う食育は、特に継続が必要なものです。私たちに求められているのは、一時的な改善ではなく、意識の刷り込み・習慣化だと思います。そのためには、「こうしなさい」という指示ではなく、「こういう方法もある」という選択肢の教示を意識して、子ども自らが自分に合った選択肢を作り出して決めさせることが重要だと思いました。点が重なれば線となり、線が重なれば面となります。そんな指導ができるよう、長期的な目で子どもの意思決定を促す指導を重ねていきたいです。

「先生はいつか離れる」という言葉がとても印象に残っています。この言葉から「どんな子どもを育てていくべきか？」のイメージができました。小中学校で行う食育は、子どもたち自身の生活習慣や行動に直結することから、自ら考え、学び、行動できる子どもを育てることができれば、小中学校を卒業しても生涯健康に過ごすことにつながると改めて思いました。

展示　～食の SHIN 化 地域と子どもをつなぐあいちの給食＆学校の食育～

６月１８、１９日に行われた「第１７回食育推進全国大会 in　あいち」に出展した本協議会のブースに約１０００人のご来場がありました。その時の展示をウィルホールロビーで紹介しました。幼児から大人へつなげる学校給食を中心とした食育実践活動や、コロナ禍でも楽しく過ごすための給食の時間の工夫、地域とつながる学校給食の取組等についての内容でした。また、各市町村等が「地域と子どもをつなぐあいちの学校給食」をテーマに料理の写真とその説明を作成したものを展示しました。

式典

愛知県教育委員会 保健体育課 課長 久保田昌俊様をはじめ、愛知県小中学校長会、公益財団法人愛知県学校給食会、愛知県高等学校給食研究協議会、愛知県特別支援学校長会他多くのご来賓の皆様にお越しいただき、ご祝辞を頂戴しました。

地区別研究発表

海部地区(海部地区栄養教諭・学校栄養職員研究協議会)
「生活習慣病の予防を意識して、適切な量の野菜を食べる子の育成
―野菜摂取量に着目した食の指導を通して―」

生活習慣病予防に役立つ野菜の働きや量を知らせることで野菜を取り入れた食事の大切さを理解させ、適切な量の野菜を食べることの行動変容を目指した。そして、野菜摂取チェックカードを使って、家庭での野菜摂取状況を定期的に振り返らせることで、野菜を積極的に食べようとする意欲を継続させ、適切な量の野菜を食べる行動へとつなげた。

知多地区（知多地区栄養教諭・学校栄養職員研究会）
「栄養バランスの整った朝食の大切さを理解し、
主食・主菜・副菜のある朝食を食べる子の育成
―学級活動の食に関する指導を軸にした朝食チェックカードの活用を通して―」

動画や栄養診断など、ICT を活用して、学級活動や給食の時間に発達段階に合わせた指導をした。授業のワークシートには保護者のコメント欄を設けた。学級活動後に朝食チェックカード等に取り組み、自身の不足した食品を把握することで、不足するおかずや食品を朝食に付け足す児童を増加させることができた 。

指導講評

愛知県教育委員会 保健体育課 主査 伊藤正志 氏

海部地区、知多地区の発表について、指導講評をいただきました。

海部地区の実践後の野菜摂取状況アンケートでは、生活習慣病予防を意識した意見が多くみられたのでよい。行動や意識の変容につながり、研究仮説及びその手だては有効であったと言える。「おわりに」では、小、中、さらに生涯を通じた大きな視点から取り組みの必要性が課題として取り上げられていて大変よくまとまった内容となっている。

知多地区の発表の「実践と考察」では朝食内容の改善の難しい児童の変容をみるなど、一人でも見捨てない取組が随所にあった。動画や栄養バランスを診断できるレーダーチャートなど、ICT を活用した授業、実践の面白さ、緻密さがみえてくる。ただ、成果が確認できた後の取組期間以外では、朝食摂取率が元に戻ったので、次回の新たな研究として取り上げてほしい。

「日々の給食の時間の指導、学級活動等での食育の実践は一つ一つが点である。その点が目指す子ども像等と同じ方向を向くと、線となる。それが複数の学年、複数の年月で実践が行なわれると線が集まり、より太くなるので、そのようにより太く、より長い線で研究を進めていくとよい。」というご指導がありました。